



2017 年度（第 13 回）こども環境学会賞の発表

2018 年 3 月 20 日

顕彰委員会委員長 高木真人
論文・著作賞選考委員長 高橋勝
デザイン賞選考委員長 石井賢俊
活動賞選考委員長 神谷明宏
自治体施策選考委員長 宮本照嗣

2017 年 7 月より公募致しましたこども環境学会の学会賞につきましては、2017 年 10 月末までに論文・著作賞 9 件、デザイン賞 10 件、活動賞 5 件、自治体施策賞 2 件のご応募をいただきました。

選考委員による厳正な審査の結果、論文・著作賞 1 件、論文・著作奨励賞 1 件、デザイン賞 2 件、デザイン奨励賞 4 件、活動奨励賞 1 件、自治体施策奨励賞 1 件、以上合計 10 件が選定されました。

受賞者および講評は以下の通りです。（順不同）

こども環境・論文・著作賞

《論文・著作賞》

三輪律江（横浜市立大学）、谷口新、藤岡泰寛、松橋圭子、田中稲子、吉永真理
「まち保育のススメ」

《論文・著作奨励賞》

柳田宏治（倉敷芸術科学大学）、林卓志、矢藤洋子
「すべての子どもに遊びを ユニバーサルデザインによる公園の遊び場づくりガイド」

こども環境・デザイン賞

《デザイン賞》

仙田考（鶴見大学短期大学部）、浅井淳、中川由美子、小島孝一
「四街道さつき幼稚園 園庭環境改善計画」（千葉県四街道市）

《デザイン賞》

手塚貴晴＋手塚由比（手塚建築研究所）、今川憲秀、角館まさひで、石川圭一
「あさひ幼稚園」（宮城県本吉郡南三陸町）

《デザイン奨励賞》

川島真由美（川島真由美建築デザイン）
「認定こども園 勿来幼稚園」（福島県いわき市）

《デザイン奨励賞》

久保久志（東畑建築事務所）、堀部篤樹、笠井尚、内海慎一、橋本雅好、伊藤綾那
「新城市立作手小学校・つくで交流館-地域とこどもが育ち合う「共育」の場」（愛知県新
城市）

《デザイン奨励賞》

小松豪（小松設計）、高橋裕美、岩上健司、小西泰孝、伊藤教子、内藤真理子、斉藤順也
「小平なみき保育園」（東京都小平市）

《デザイン奨励賞》

房前寿明（ユニップデザイン）
「一宮どろんこ保育園」（千葉県長生郡一宮町）

こども環境・活動賞

《活動賞》

該当なし

《活動奨励賞》

加藤寛子（関東第一高等学校）、八木貴司
東京下町の廃材から地域の魅力を発見！高校生主体のアートプロジェクト「下町素材見本
市」の取り組み

こども環境・自治体施策賞

《自治体施策賞》

該当なし

《自治体施策奨励賞》

「子ども110番の家」の発祥地である可児市

以上が受賞されたものですが、選考に漏れた方々におかれましても受賞者に劣らないすぐれた学術活動や実践活動であることを申し添えますとともに、さらに一層の活躍を祈念いたします。また更に多くの会員の皆様が次回の学会賞に応募されますことを期待いたします。

【各賞の対象と審査委員】

(1) こども環境論文・著作賞

近年中に完成し発表された研究論文および著作出版物であって、こども環境学の進歩に寄与する優れたもの。

選考委員：

委員長：高橋勝（横浜国立大学名誉教授・教育哲学）

委員：織田正昭（福島学院大学教授・国際保健）、河原啓二（姫路市医監／保健）、住田正樹（放送大学名誉教授・発達社会学）、仙田満（東京工業大学名誉教授・環境建築学）、福岡孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）、矢田努（愛知産業大学教授・建築学）

(2) こども環境デザイン賞

近年中にデザインされた環境作品（建築・ランドスケープ・インテリア・遊具・家具・グラフィックその他）であり、こども環境学的見地からも高い水準が認められる独創的なもので、子どもの成育に資することが認められるすぐれた環境デザイン。

選考委員：

委員長：石井賢俊（NIDO・プロダクトデザイン）

委員：及部克人（武蔵野美術大学名誉教授、デザイン）、佐久間治（九州工業大学教授・建築学）、定行まり子（日本女子大学教授・住居学）、仙田満（東京工業大学名誉教授・環境建築学）、竹原義二（摂南大学・無有建築工房・建築家）、千代章一郎（広島大学准教授、建築学）、福岡孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）、松本直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）

(3) こども環境活動賞

こども環境に寄与する、上記以外の活動（施設運営・行政施策・社会活動・その他）であって、近年中に完成した業績および継続的な活動によってその成果が認められた活動。

選考委員：

委員長：神谷明宏（聖徳大学准教授・児童学）

委員：井上美智子（大阪大谷大学教授・幼児教育）、北方美穂（日本フィンランド教会事業推進委員）、小澤紀美子（東京学芸大学名誉教授・住環境教育、まちづくり教育）、四釜喜愛（食と森の保育園しかま副園長・幼児教育）、吉永真理（昭和薬科大学教授・発達心理）

(4) こども環境自治体施策賞

こども環境に寄与する行政施策であって、近年に完成、完了した施策、若しくは継続中の施策でその成果が認められるもの、又は近年に着手された施策で、顕著な成果が生じ始めていると認められるもの。

選考委員：

委員長：宮本照嗣（市民参加まちづくりパートナー）

委員：五十嵐 隆（国立成育医療研究センター理事長）、佐久間治（九州工業大学教授・建築学）、高木真人（京都工芸繊維大学准教授）、中島興世（子育てと教育を考える首長の会事務局長）、三輪律江（横浜市立大学学術院准教授）、松本直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）

こども環境・論文・著作賞

<総評>

今回の応募は、著作2編、論文7編の合計9編で、昨年度の応募総数11編に比べると、若干少ない。しかし、このところ10編前後の応募があるということは、学術面での活発な活動と成果が継続的に見られることを意味している。この9編の著作・論文を、7名の選考委員全員に6~7編ずつ査読してもらい、10点満点で採点した結果とその詳細なコメントを提出して頂いた。さらに選考委員会を開催し、厳正かつ率直な意見交換を行った上で、下記のように論文著作賞と奨励賞を選出した。

応募作品9編の研究テーマを見ると、①保育を地域づくりに積極的に関わらせる「まち保育」を推進する研究、②ユニバーサルデザインの視点から、子どもの遊び場作りを具体的に提案する研究、③東日本大震災から3年後の福島県のある地域における幼児の身体活動量を測定した研究など、実に多彩な研究テーマを見て取ることができる。子どもの成育環境をめぐる領域横断的な本学会の長が如実に現れている。

その中で、とりわけ選考委員の注目を集めたのが、『まち保育のススメ——おさんぼ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくり』で、各選考委員から共通して高い評価を受けた。よって、本書を論文著作賞に決定し、これに次いで高い評価を受けた著作『すべての子どもに遊びを—ユニバーサルデザインによる公園の遊び場作りガイド』を奨励賞として表彰することとした。

(論文・著作賞選考委員長 高橋勝)

<<論文・著作賞>>

三輪律江(横浜市立大学)、**谷口新**、**藤岡泰寛**、**松橋圭子**、**田中稲子**、**吉永真理**
「まち保育のススメ」

本書は、建築環境工学、都市計画、環境デザイン、保育学、臨床心理学など、幅広い研究分野の研究者10名による共同研究の成果である。本書では、子育てを、親の「孤育て」に閉じ込めないために、子どもを地域の沢山の大人や多世代々とかかわる「社会関係資本」(ソーシャル・キャピタル)を広げる運動の輪の中でどう育てていくか、また、それによって地域自体も息を吹き返し、「まちが再生していく」ための具体的な方策やアイデアが盛り込まれている。

緻密な学術的研究書でありながら、ことばは平易そのものであり、子どもが育つ環境のソフト面(対人関係が織りなす暮らしの居場所)とハード面(地理的空間)とが見事に融合して、子どもの視線で「まちが育つ」という実に斬新なまちづくりのプログラムが生き生きとリアルに提示されている。

(高橋勝)

<<論文・著作奨励賞>>

柳田宏治(倉敷芸術科学大学)、**林卓志**、**矢藤洋子**
「すべての子どもに遊びを—ユニバーサルデザインによる公園の遊び場づくりガイド」

「ユニバーサルデザインによる公園の遊び場づくりガイド」という副題がつく『すべての子どもに遊びを』という本は、従来にないユニバーサルデザインという視点からまとめられた公園デザインの本としてきわめてすぐれた著作と言える。

編著者はみーんなの公園プロジェクトの倉敷芸術科学大学教授の柳田宏治さんと、岡山東支援学校教諭の林卓志さん、そして岡山ユニバーサルデザインシニアデザイナーの矢藤洋子さんたちである。現在、我が国ではさまざまな障害をもつ人が6%いると言われているが、本来的にはすべての人が何らかの障害をもっていると考えなければならない。私自身、こどもの

頃は不安神経症に悩まされ、高いところや閉鎖的な空間に近寄ることもできなかった。パニックになってしまっていた。眼鏡をかけているが、それもまた障害である。障害を持っていない人の方が少ないと考えるべきなのだ。そういう点で、すべてのこどもたちが元気に遊びたいという気持ちをもち、挑戦するためのデザインガイドラインとして、とても有効である。

これから公園を設計する人、遊具をデザインする人ばかりでなく、こどもの活動に関わる全ての人に読んでもらいたい本である。

(仙田満)

こども環境・デザイン賞

<総評>

こども環境学会デザイン賞は子どもの視点に立つ建築、造園、遊具、プロダクト、絵本、グラフィックス等さまざまなデザイン領域の総合的な評価より優秀なるデザイン作品を表彰するものである。

今年度は13回目のデザイン賞であるが応募作品10点から、まず書類審査で8点を選出した。次に複数の審査委員による現地審査および作者と施設ユーザーからのヒアリングを実施した。その報告書を基に審査委員合同による検討審査会を行い、デザイン賞2点、奨励賞6点を決定した。

今年度の応募作は全体的にデザインレベルが高く、各々の作者がこどもの視点に立った質の高い環境デザインを構築していた。本デザイン賞審査委員は、環境建築学、住居学、建築家、建築史学、視覚伝達デザイン、スポーツ環境、建築計画学、プロダクトデザインなど多様な領域の専門家によって構成されているが、今回の最終審査会においても審査委員各自の視点からの活発な討議をもとに厳密な選考が出来た。

デザイン賞、奨励賞を獲得なさった作者に敬意を表するとともに、本デザイン賞に応募および推薦をしてくださった皆様に深く感謝しつつ、さらに広範囲なこども環境領域のデザインに関わっておられる方々の本デザイン賞への挑戦をお願いしたい。

(デザイン賞選考委員長 石井賢俊)

《デザイン賞》

仙田考 (鶴見大学短期大学部)、**浅井淳**、**中川由美子**、**小島孝一**

「**四街道さつき幼稚園 園庭環境改善計画**」(千葉県四街道市)

本施設は、敷地面積5547, 2㎡、園舎延面積1417, 78㎡の屋外環境保育の在り方をデザインしたものである。現在こども園である本園には1歳児から5歳児まで約190名の乳幼児が生活しているが、作者は園との話し合いの中から以下に記す3つの基本軸を構成して屋外環境体験の重要性を具体的に定着させている。

① 年間を通しての自然とのふれあい体験。畑、池、動物小屋、ビオトープを通して農作物、植物、昆虫、魚、動物、などの成長を五感を通して体験できる。

② 回遊式遊具による運動遊び環境。バランス運動、昇降運動などの多様な遊びができる連続性のある運動遊び遊具群による遊びの活性化。

③ 地域参加による保育活動。ここでは多様な生活の技をもった親たちが参加することによってこどもたちの体験の質が深くなることを図っている。例えば、農作の技を持つ地域のボランティアや親が整然と耕した見事な畑は土の生命感を美しく発信する、その土にこどもたちは大切に種をまき、時間をかけて育て、収穫し、皆が集まって食事会をするのだが、その

工程を通して子どもたちは農作の本質の喜びを体験できていると思える。

このように①②③の基本軸が統合化される保育を、各年代の子ども集団が四季を通して高密度に体験できるための適確なプランニング、作業スペース、動線、安全性などが機能的にデザインされた屋外保育環境である。幼児教育の重要な本質を環境デザインとして強化した先駆性と、地域参加型ランドスケープデザインの構成力を高く評価したい。

(石井賢俊)

《デザイン賞》

手塚貴晴+手塚由比（手塚建築研究所）、**今川憲秀、角館まさひで、石川圭一**
「あさひ幼稚園」（宮城県本吉郡南三陸町）

東日本大震災で被災したあさひ幼稚園再建の第1期工事は、樹齢300年を超える巨木杉が津波の塩をかぶり枯れてしまった。この杉丸太を建築材として活用した超寿命木造建築である。幼稚園は小高い丘の上に建ち、地域復興のシンボルとして街の人々に慕われていた。

しかし2年後に周辺の街づくりの造成工事が始まり、幼稚園の建つ山を崩して平らな住宅地を作るので移転してほしいという話が持ち上がった。途方に暮れていたとき、園舎再建に協力してくれた町長が、幼稚園の建物を残して残地に園を増築するという提案を決定してくれた。

このため2期工事の幼稚園は丘の上に建つ園舎を残して、削られた斜面地に建築することが余儀なくされた。が、逆に斜面を生かした律動的な建築となった。1期工事と同じ高さに職員室が位置し、階段で半階下がる高さに遊戯室が空中に浮いたように建てられている。軒の出を深くした回廊を通して見える三陸沖の風景は素晴らしく、風が通り抜ける。また斜面地と建物の床下空間は秘密基地などとしてうまく使われ、斜面が子どもたちにとって格好の遊び場として活用されている。さらに階段で1層分下がった高さに2つの保育室が園庭とつながっている。

地形を生かした3棟の建物は分棟形式を持ち階段室でつながる。建築と地形がうまくからみあって子どもたちはのびのびと一日を楽しんでいる。木造大断面で構成された力強い空間は子どものスケールに合わせるように天井高を低く押さえて室内と室外が回遊できる廊下でつながり、素朴ではあるが雄大で遊び心を誘発する優れた建築である。

復興のシンボルとして地域に溶け込んでいる点は高く評価できる。

(竹原義二)

《デザイン奨励賞》

川島真由美（川島真由美建築デザイン）
「認定こども園 勿来幼稚園」（福島県いわき市）

計画地は住宅間を縫うように細長く不整形である。幼児の数から必要な面積を持つ保育室などの諸室を一単位とし、透明なガラスによる14の立方体を敷地に即して角度を振り、点在させる手法となっている。周辺住宅地に高さも合わせ、地域の住民に見守られ、良好な関係性を持たせている。耐火要件をクリアさせ、意匠性の高い厚みを持った木材による壁を構造体と大きなガラス越しに見える幼児たちの積み木遊びの相互関係が微笑ましい。

各学年2、3教室ずつ大屋根をかけて屋内広場のような空間がある。新しく認定こども園の開設にあたり、「保育」と「教育」が共存でき、発達成長が著しく異なる年齢に応じられる共有部分を提供するようになっている。敷地に限りがあるが、いろいろな隙間がある「たくさんの広場」で異年齢交流をし、一方に個々に居場所をつくる多様な過ごし方ができる場所が提供されている。

卒園した小学生や中学生もが懐かしい場所としてここを遊び場としているという。地域に

根ざした幼稚園は、空間のあり方と教育運営の努力によって新たな展開を見せるに違いない。庭などに植えられた樹木が成長することにより周辺の住宅との一体化した新たな幼稚園となるだろう。

(及部克人)

《デザイン奨励賞》

久保久志（東畑建築事務所）、**堀部篤樹**、**笠井尚**、**内海慎一**、**橋本雅好**、**伊藤綾那**

「**新城市立作手小学校・つくで交流館-地域とこどもが育ち合う「共育」の場**」（愛知県新城市）

地域のコミュニティの活性化を目指す中で、子どもたちの居場所、地域の活動の中心を創り出すことが求められた施設である。

施設中央の芝生の中庭と木製デッキと列柱による半外部の回廊空間が、小学校の特別教室、ランチルーム、ホール、図書機能を、緩やかに連結しながら多様なアクティビティが誘発される計画となっている。生徒と市民とがフレキシブルに相互利用できる管理区分の工夫がいたるところに見られた。

新城市産の杉檜等地域木を多用すると共に RC や鉄骨等のハイブリッド形式をうまく取り入れ、ヒューマンスケールを維持した木質空間のテクスチャーを実現している。

コミッショナー、デザイナー、教育関係者を交えた市民や子どもの参加を大切にした整備プロセスの成果を、空間や使い勝手に見ることができる。

中庭回廊による連動利用が可能で、地域に開かれた中庭、ランドマークとなるランチルーム、音楽に特化したホールとの関係性、グランドと教室前の緑化計画、採光を活かした木架構空間など設計者の決め細かい配慮が見られ全体として優れた建築空間であると評価できる。

(佐久間治)

《デザイン奨励賞》

小松豪（小松設計）、**高橋裕美**、**岩上健司**、**小西泰孝**、**伊藤教子**、**内藤真理子**、**斉藤順也**

「**小平なみき保育園**」（東京都小平市）

小松豪さんが設計された「小平なみき保育園」は、東京の郊外、小平市で50年以上の歴史をもつ「小平なみき幼稚園」（定員300人）に隣接して建てられた0～2歳児のための保育園（定員50人）である。敷地は約1,100㎡、建築延面積約500㎡。コンパクトな保育園となっているが、分棟型、木造で、きわめてファミリアな保育園としてつくられている。

切妻型の屋根、極木を美しく見せながら、全体がこどもたちを包む暖かさに満ちている。エントランスの構成が秀逸である。子育て支援室と遊戯室機能をもつコミュニティー棟と、バギー置き場、だれでもトイレ等で構成する棟が二棟で連なり、長屋門のような役割を果たしている。その間を抜け、園庭と農園をつなぐわたり廊下を経て玄関に至るアプローチはとても気持ちが良い。小さな中庭型の園庭を囲む形の園舎構成も優れている。

建築設計とともに、造園、グラフィックデザイン等、多くの人とのコラボレーションも大変うまく結実している。それは何よりも小松さんの人柄によるものと思える。理事長の石橋樹氏、園長の日景高明にもお話を伺ったが、こどもたちの生活にはとても満足されており、将来の幼稚園の建替えを含めたさらなる園の発展が楽しみと思われた。

(仙田満)

《デザイン奨励賞》

房前寿明（ユニップデザイン）

「**一宮どろんこ保育園**」（千葉県長生郡一宮町）

本施設は保育所型認定こども園として約8000㎡の敷地の中に延べ床面積1368㎡のL字型の建物が建てられている。そのL字の辺が向かいあう位置に高さ7メートルの築山と低い小山が築かれている。L字型の園舎は、園庭に向かってのびのびとした傾斜角をもつ大屋根が幅3m以上の深い縁側まで覆って美しく伸びている。

縁側では園児の受け渡しや給食、雑巾がけなどが行われるが、ところどころに幅の変化をもたせて、こどもたちの路地的な遊びを発生させている。L字型のすべての保育室から縁側に飛び出して、裸足のまま芝生の園庭を走って築山に駆け上れるようにデザインされている。高い築山に登ると町の全景が見渡せて実に気持ち良い。1歳児は低い方の山に這い上がって、そのままの姿勢で下りてくる。

建物内部は大断面集成材を多用しているが木材の生命感が温かく保育室や広い遊戯室を演出して、0歳児から5歳児まで170人の異年齢保育を支えている。広い園庭には果樹、田植え、稲刈りを体験できる田んぼや動物小屋、ビオトープも造られている。

「人間力を身に着けるために必要な遊びと野外体験の実践を・・・」という本園の教育理念に質の高いデザイン力で応えた愛情深い建築である。

(石井賢俊)

こども環境・活動賞

<総評>

本年度は活動賞への応募総数が5件と、かつてない少ない候補についての審査となりました。その結果、以下にご紹介をいたしますように奨励賞1件と、大変さみしい選考となりました。

活動賞の審査の視点は、①一過性ではなく継続性があること、②子どもの参画による活動であることはもちろん、子どもの自尊感情を育む活動であること、③個人の活動であり、地域やコミュニティの活性化への広がりが見られること、④新しい試みで波及効果の可能性のある活動であること、⑤各種の組織との協働の仕組みが活かされた活動であること、などです。

今年度の応募の内容を拝見いたしますと、一昨年度ご指摘させていただいた、一過性のイベント的な活動や大学の科研費を用いたその場だけの活動がみられたこと、継続性のある先駆的な活動や新しい試みに挑戦している活動がほとんどなかったことが顕著でした。また、過去に応募して受賞を逃した実践内容を全く同様な形で応募されたケースもありました。選考委員会ではこれらの結果について、実践的な活動を展開している組織・団体の主活動や発表の時期と応募期間が重なっているため、応募を見送ったケースがあったことも踏まえ、新たな応募期間の検討や審査基準の見直しなど検討していきたいと考えております。

今回、惜しくも受賞を逃した皆さまの活動も、今後もさらに研鑽をしていただき、改めてチャレンジしていただきたいと感じました。

(活動賞選考委員長 神谷明宏)

<<活動賞>>

該当なし

<<活動奨励賞>>

加藤寛子(関東第一高等学校)、八木貴司

東京下町の廃材から地域の魅力を発見！高校生主体のアートプロジェクト「下町素材見本市」の取り組み

江戸川区の私立関東第一高等学校の高校生たちが、廃材を利用したプロジェクト「下町素材見本市」に2016年から取り組んでいます。廃材に目を付けたきっかけは、この高校の工業科が廃科となった際に大量の電子部品等の廃材が出たこと。廃材をアートという別の視点から見て、そのおもしろさを発見した高校生たちは、アートプロジェクトの実施に向けて、地域の企業を訪問し協力を願い出ます。

このプロジェクトの最も評価された点は、地元高校生が地域の財産に新しい価値観をもたらし、高校生が中心となって主体的に地域コミュニティのネットワークの形成に取り組んだところです。高校生が一つひとつの地元企業を訪問し廃材提供と協賛金のお願いをするなど、その行動力は企業間をつなぎ、企業と町をつなぎ、また地元で暮らす住民をつなぎます。まだ、始まったばかりのプロジェクトですので、今後の継続と発展を期待して奨励賞といたします。

(北方美穂)

こども環境・自治体施策賞

<総評>

本賞が対象とする「こども環境に寄与する自治体の個別の行政施策」は、昨年度まで活動賞の対象分野に含まれていました。しかし、今まで応募が無かったことから、自治体が自ら応募者となるのが困難であることに配慮して、今年度から推薦方式による独立した賞として創設したものです。

具体には、「近年に完成、完了した施策、若しくは継続中の施策で、その成果が認められるもの、又は近年に着手された施策で、顕著な成果が生じ始めていると認められるもの。」について、会員から推薦された施策と、本学会の「こども自治体委員会」から推薦された施策をあわせて候補とし、本審査委員会が選考する仕組みとなっています。

今回は、会員からの推薦1件と前述の委員会からの推薦1件があり、その中から1件を「継続中の施策で、その成果が認められるもの」で、「奨励賞」にふさわしい施策として選定いたしました。

自治体の施策は、こども環境を改善していく上で大きな役割を果たします。本賞は、優良な施策が社会の注目を浴びて他の自治体に影響を及ぼすとともに、当該自治体において施策がさらに拡充されることに役立つと思われます。

会員の皆さんが「これぞ!」と思われる個別の行政施策を積極的に推薦いただき、「自治体施策賞」が現れることを期待しております。

(自治体施策選考委員長 宮本照嗣)

《自治体施策賞》

該当なし

《自治体施策奨励賞》

「子ども110番の家」の発祥地である可児市

街を歩けば、よく住宅の門などに「子ども110番の家」と書かれた看板を見かける。この「子ども110番の家」は、岐阜県可児市から始まった制度で、子どもへの不審者の「つきまとい」や「声かけ」、誘拐や暴力などの「凶悪犯罪」の未然防止のための、子どもの緊急避難先となっている。

平成6年4月、岐阜県羽島市において、下校途中の小学校2年生の殺害事件があった。こ

の事件を契機に、可児市今渡北小学校PTAが中心となり、可児警察署生活安全課長からの発案のもと、可児市今渡北小学校、可児警察署、地元自治連合会、子ども会育成協議会、地域防犯協会、商店、事業所などが連携し、平成8年3月「子ども110番の家」としてスタートし、その後可児市における重要な施策となった。

子どもの安全を願う親の思いは全国共通であり、以降「子ども110番の家」は広く全国に波及し、多くの子ども達を守るシステムとして採用され、人々に知られるところとなった。可児市に生まれた「子ども110番の家」は、地域の様々な団体が一致団結・協力して成立したもので、現在も活動が発展、洗練・継続されている。私自身は、「自治体施策賞」として十分にふさわしいと考えるが、自治体施策部会においては意見が分かれ、結局は「奨励賞」ということになった。

(松本直司)

公益社団法人 こども環境学会事務局
〒106-0044 東京都港区東麻布 3-4-7
麻布第1コーポ 601
Tel: 03-6441-0564 / Fax:03-6441-0563
E-mail:info@children-env.org
